

4 歳児実践事例

「考えたり試したりして満足感を味わった事例」

1 子どもの実態（9月）

- 進級時に担任が変わったが、子ども同士は進級時から安心して関わり合える関係である。
- 自分と好きな物が同じ友達や、やりたいことが同じ友達と2~3人で遊ぶようになっている。
- 自分の思いを言葉や動き・態度で表現するが、友達の様子に目を向けたり、言葉に耳を傾けたりする相手意識には個人差がある。

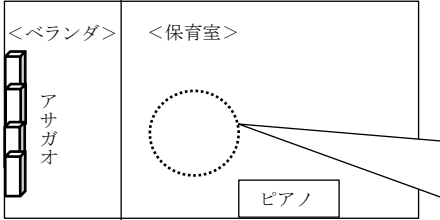
<A児の実態>

- 進級当初からヒーローごっこやままごとなどの遊びの中で、友達と追い掛け合ったりじゃれ合ったりすることを好み、誰とでも穏やかに関わる。常に友達と同じことをして遊んでいるが、一人でじっくりと取り組む活動にはあまり興味・関心を示さない。

2 教師の願い（ねらい）

- 気の合う友達と関わりながら、自分のやりたい遊びを十分に楽しむ。（期のねらい）
- 自分の興味・関心のあることに向かい、考えたり試してみたりしながら遊ぶ満足感を味わってほしい。（A児への願い）

3 保育の実際

幼児の姿（下線…環境構成と教師の援助）	教師の意図
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">  <p style="font-size: small;"><ベランダ> <保育室></p> <p style="font-size: x-small;">アサガオ</p> <p style="font-size: x-small;">ピアノ</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="font-size: x-small;"><物的環境></p> <ul style="list-style-type: none"> ○透明プラボトル（100ml程度の小さい容器） ○透明プラカップ（プリンやゼリーが入っていた小さい容器） ○割りばし ○銀盆 <p style="font-size: x-small;">※ミニテーブルの上に置いた。</p> </div> </div> <p><9月中旬></p> <p>猛暑の影響で、1学期から育てているアサガオのピンク色のつぼみが咲く前にしおれ、ベランダにたくさん落ちていた。ピンク色の液が、ベランダの所々にこびりついている現象がきっかけとなり、ピンク色の色水作りが始まったため、①色水作りの場（※上記の物的環境）を設置した。</p> <p>色水を作り始めた子どもをまねて、A児もつぼみと水をボトルに入れて割りばしで突き、キャップを閉めてボトルを振りながら色付く様子を見ていた。ピンク色に色付き始めると、「ももジュースだ」と言って友達と見せ合った。「もっと入れよう。」と言って、さらにつぼみを追加し、ボトルを振り続けた。ピンク色が濃くなってくると、「見て。ぶどうジュースになった。」と言った。②教師は「本当だ。ももジュースもぶどうジュースも作れるのね。」と言って両方とも飲むまねをした。③学級活動時に、A児がももジュースとぶどうジュースを作ったことを紹介し、A児はみんなに作り方を説明した。</p> <p>翌日から、A児は登園すると一人でジュースを作り、できたジュースを大事に持ちながら次の遊びに向かうことが続いていた。</p> <p><9月29日（金）>※この頃より、毎日30輪程の花が咲くようになった。</p> <p>B児が「見て。青いジュース。」と言って、青い色水の入ったボトルを教師に見せに来た。④教師が驚いて「すごい。どうやって作ったの。」と尋ねると、B児は黙っていた。A児や他児もその様子を見て、「どうやるの。」と尋ねた。B児は気まずそうな表情で、その時咲いていたたくさんの青いアサガオ（つぼみの時はピンクだが、咲くと青色になる）の方を見た。⑤教</p>	<p>① 1学期には園庭の植物を使って色水作りをしたり、最近では絵の具の色水を混色したりして、色が付く現象や変化する現象を不思議がったり面白がったりしていた。自分で色を出すことに興味・関心があると捉え、やりたい時に身近なアサガオを使って色水を作ることができるようにした。</p> <p>② A児が自分で考えたことを認めようとした。</p> <p>③ 学級全体の中で紹介することで、A児の考えたことを価値付けようとした。</p> <p>④ これまでのピンク色だけでなく、他の色も出すことができたというこ</p>

師が「もしかしてこれ。」と明るい口調で言うと、B児は少し頷いた。⑥教師が「お花を使うとこんなにきれいな青色になるんだね。」と言うと、すぐにまねて花を摘もうとする子どもがいたが、「咲いているのはだめだよ。」と止める子どもがいた。⑦教師は理由を聞いたり、やりたい気持ちに共感したりしながら、子どもたちの「かわいそう」「やってみたい」という思いを聞いた。「たくさん咲いているから摘んでもいいが、一人が一つだけ」という約束をすることでどの子どもも納得した。A児もやりたがり、青い花を一輪摘んで青色ジュースを作り、いつものように大事にボトルをもって遊び始めた。

<10月2日(月)>

登園したA児が前日に作った青色のジュースのボトルを探していた。「たしかここに置いたはず。」と言うが、そこにあるのはピンク色のジュースが入ったボトルだった。納得がいかない様子であったが、「また青いジュース作る。」と言って、一輪のアサガオの花で青いジュースを作った。⑦教師はA児のボトルの目印となるように、好きな色のビニールテープを貼ることを提案すると、A児はキャップに小さくビニールテープを切って貼った。

降園の準備中、A児が自分の目印の付いたジュースを持ってきて、「見て。ジュースが紫になった。」と言った。⑧教師は驚き、その後の降園活動時にA児からみんなにジュースの色を見せる機会を設けた。子どもたちは「腐るから」「魔法がかかっている」など口々に考えたことを話した。⑨教師は子どもたちの前で、A児の紫色になったジュースをタブレットで撮影した。

<10月3日(火)>

登園したA児が自分の目印のついたボトルを持ってきて、「ピンクになった。」と驚いた様子で見せに来た。登園していたC児とD児も見に来た。⑩教師は「本当だ。あれ。昨日は何色だったかしら。」と言うと、A児は「最初は青で次は紫。」と答えた。⑪教師がタブレットの写真を横に置いて見せると、前日の降園時とは色が異なっていた。教師が⑫「すごい。Aさん大発見だね。」と言うと、A児はうれしそうな表情をした。A児は再びC児・D児と一緒に青色ジュースを作り、⑬教師はA児・C児・D児と一緒にタブレットで撮影をした。翌朝には青色だったジュースがまたピンク色になっていた。登園した子どもたちは、次々にタブレットの写真とジュースを見比べていた。

その後、子どもたちは青色ジュースを作ると、色の状態を確認したり、「まだ変わらない」「青色のままがいい」など、気付いたことや思いを知らせ合ったりしていた。また、A児が友達と一緒にこれまでに作ったジュースのボトルの色分け(青色や紫色、ピンク色、茶色など)をして遊ぶ姿が見られた。

とを価値付けようとした。

⑤ B児の表情から、花を摘んではいけないのかもしれないという思いがあるために、言い出しにくくなったと考えた。

⑥ B児の発見を肯定的に受け入れていることを伝えようとした。

⑦ 同じボトルのジュースがいくつもあったため、自分の物の判別ができるようにした。

⑧ A児の発見をみんなで共有しようとした。

⑨⑩⑬ 色の変化を視覚的に比較できるようにしようとした。

⑩ A児自身の気付きとなるように聞き返した。



4 考察

- 青色だけの1色咲きのアサガオであったため、色水遊びとしては生かしくい素材であると考えていた。しかし、偶発的な自然現象や、子どもの思い付きによって、時間の経過で色が変化していくことを発見した。絶えず変化し続ける自然物に触れることは、子どもが考えたり試したりするきっかけとなることを実感した。また、同時にこれまで教師の先入観で子どもの人・もの・ことへの関わりや広がりや深まりのきっかけを見取れていなかったことがあったのではないかと反省する。
- A児が「面白い」「不思議」と心を動かしたタイミングで、自分からやってみたくことをやる時間や場の保障をしたこと、また、小さな気付きを友達と共有したことで満足感を味わっていたと思われる。今後は、A児が人・もの・ことに興味・関心をもった瞬間を大切にするとともに、自分がやりたいことに向かうことができるように支えていく。